

『本当の話』 訳と解題 (3)

モンテスキュー

田 口 卓 臣 訳

解 題

今回は、III章の途中までを翻訳した。I章、II章と異なり、III章はかなり長めの章だからである。前回までの解題で書かなかったことを含め、改めてI章からIII章までの概要を振り返っておこう。

作品の舞台は、バックス祭の日に宴会を催すディオクレスの屋敷である。ディオクレスに招待された異邦人たちが、宴席を盛り上げるために、みずからの不思議な転生物語を披露していく。ディオクレス自身は終始沈黙しており、彼ら異邦人の物語に耳を傾けるばかりである。

I章は、インド人の旅行家アイェスダによる物語である。アイェスダは四千年前、欺瞞だらけの生き方をしていたことが守護霊の不興を買い、昆虫や動物の生を転生し続けることになる。キリギリス、アリ、モンズズメバチ、ナイチンゲール、カササギ、小犬、狼、熊、牛、象、馬など、アイェスダは非人間としての生と死を繰り返している。この一連の物語を通して浮き彫りになるのは、非人間たちの生に突如として訪れる死の呆気なさ、そんな非人間たちを取り巻く人間たちの滑稽と愚劣である。特に後者に関しては、人間に近い動物たち（牛、象、馬）を通して、宗教儀礼、暴君政治、法官の私生活など、それぞれの内情が暴露されていく。その暴

露のプロセスの中で、非人間的存在者の視点が一貫して保持されている。

II章は、エフェソス人の哲学者ダミルによる物語である。アイェスダとは異なり、ダミルは人間たちの生を転生し続けた経験について語っていく。彼が転生したのは、徴税請負人、ヘボ詩人、宮廷詩人、賭博者、放蕩者、寄食者、大食家など、十八世紀当時においては「余計者」とみなされていた者たちばかりである。こうしたダミルの物語を通して、I章の物語内容をはるかに上回る人間的生の滑稽と愚劣が活写されることになる。とりわけ、宮廷社会を頂点とする社交界の腐敗を描き出すダミルの語り口は、冷徹にして凄絶である。かくして、アイェスダとダミルの物語が蓄積されることで、様々な地域や社会の差異を超える人間の根源的な滑稽と愚劣に光が当てられるのである。

さて、今回訳出したIII章の語り手が誰なのかを特定することは難しい。この章の冒頭では、I章とII章の物語内容が踏まえられているので、宴会の主催者であるディオクレスと共に、アイェスダとダミルの物語に耳を傾けていた者であろう、と推定することは十分に可能である。しかし、この匿名の語り手の立場に関して私たち読者が知りうる事柄は、そこまでである。

III章の物語内容は、II章と同様に、人間たちの生を次々に転生した語り手の経験に基づくものである。ただし、III章がフォーカスしているのは、女性や宦官の生である。『本当の話』は、このように各章の中心的なアクターを徐々にシフトさせることで、無数の小話を重層的に変奏させてみせている。こうした作品の特徴は、モンテスキューの長篇デビュー作『ペルシア人の手紙』（拙訳、講談社学術文庫、2020年）を読み解く上でも重要な鍵となるだろう。事実、『ペルシア人の手紙』では、ペルシアのハーレムにおける女性と宦官の関係をめぐる物語が、フランスの社交界における様々な人間模様とオーヴァーラップさせられている。自然的な性に対す

る社会慣習上の拘束や方向付け、という観点に立つ時、モンテスキューのフィクションと政治思想は共通の問題構成をまとめて浮上する。

最後に一点だけ、三つの章に共通する思想的なテーマについて言及しておこう。モンテスキューは『本当の話』において、デカルトの機械論を参照しながら、その身体表象の在り方に独特の逸脱を持ち込んでいる。実際、この作品の語り手たちの「魂」は、それぞれの転生を通じて様々な「身体」への出入りを反復している（III章の語り手に至っては、一つの「身体」の中で複数の「魂」が入れ替わるという事態について語っている）。モンテスキューはこうしたフィクション特有の問題設定を介して、「一人の個人」の内側に想定される性格の一貫性というものが、実はイデオロギーに過ぎないかもしれないことを示唆するのである。思想的な用語を用いるなら、この示唆を通して取り沙汰されているのは、存在全般に内在する逸脱の要素であり、つまりは存在そのものの根源的な非同一性であろう。興味深いことに、『本当の話』においては、そのような根源的な歪みを抱えた存在に関して、「徳」を通じて社会に繋ぎとめようとする考え方が全面的に斥けられている。ところで、少なくとも政治思想家としてのモンテスキュー自身はもちろん、十八世紀ヨーロッパの啓蒙思想家たちは一般に、「存在」の問題と「徳」や「名誉」の問題を接続しながらソフトランディングさせることに力を注いでいたはずである。この思想史的事実を思い起こす時、『本当の話』における「存在」と「徳」（「身体」と「魂」）のシニカルな諸関係は、丁寧な分析の対象とされなければならないだろう。

III

——お二人とも誠実な方ですので、これまでのお話も本当だと思わなくてはなりませんね¹⁾。ただ、たまたまお二人とも狂っていたら、それも本

当の話ではなくなってしまうでしょう。けれども、これからディオクレスさんにお話するのは、私がこの目と耳で見聞したことですし、どなたでも私のように見聞したかもしれないことなのです。

ご存じのように、アブデラ（=古代ギリシアの都市）では、婦人たちが一種の狂気に落ちて、全裸のまま町に出るようになりました。もはや彼女たちが、どんな眼差しからも守るべき恥ずかしいところを表に出さないように仕向けることはできなくなったのです。ほとんど同じような病気が十年前にアテネで流行りましたが、正確に言うと同じ結果をもたらしたわけではありません。アテネで全裸になりたがったのは、魂だったのですから。誰もが奇妙なくらい無邪気に自分の話をしたので、最大の注意を払って隠すようなことでさえ口にしてしまったのです。人が失っていたのは、恥じらいの感情ではなくて、自己自身の存在とは異なる姿に自分を見せるための手腕でした。つまり、自分の悪を誇張することで悪や欠点がないように見せたり、自分の徳を貶めることですべての徳を美化する徳があるかのように見せたりする、あの手腕のことです。当時のアテネ人の状態に比肩できるのは、夢の中での自分の言動を洗いざらい打ち明ける時の私たちの状態以外にありません。こうしてアテネの人々は何事も包み隠さず、誰もが自分自身に語りかけていると思い込んでいたわけです²⁾。

この病気のうわさがギリシアの町々に広まると、大勢の異邦人がアテネにやって来ました。ところが、法官たちは同胞の弱みを見せ物にしたくなかったので、町の門という門を閉ざしてしまったのです。

1) この III 章の発話者は、明示されてはいませんが、I 章、II 章の発話者とは別人と捉えるのが最も自然だろう。

2) 原文は、「*chacun croyait parler à soi-même*」である。ただし、この一文は、モンテスキュー独特の分かりにくさを内包しており、より一層の精確な翻訳が必要と思われる。

正直に申し上げますが³⁾、自分が初めて女になった時は、私もたいへん驚きました。特に衝撃的だったのは、最初から二十五歳の女に生まれ変わったことでした。ちょうど二十五歳のご婦人が分別を失って、わが守護霊が無理やり私とその婦人の魂を入れ替わらせたので、その人の体を受け入れざるを得なかったのです。私は意気消沈していましたが、少しずつ気力を回復していきました。化粧台の上のリボンや鏡を眺めるうちに生氣を取り戻したのです。ある青年が私のもとにやって来て、ずっと前からあなたのことを愛していた、と言いました。この青年いわく、いつもあなたに遠慮なくふるまってきたが、今や遠慮なくこの愛を証明してみせたい、とのことでした。あまりに多くの快樂を青年がもたらしてくれたので、私はかつてないほどその虜になってしまいました。

正直に申し上げますが、自分が果たさなくてはならなくなった初めての役回りのせいで、私は途方に暮れるばかりでした。わが機械を動かすようになってから⁴⁾二日と経たないうちに聞き知ったのは、私がずっと前からあらゆる隣人と不仲だったこと、ある種のご夫人たちの主張を支持し、他のご夫人たちにはひどい態度を取っていた、ということでした。そして二人の男が、あの女に復讐してやる、あいつが顔を出すありとあらゆる場所で侮辱してやる、と誓っていたのです。

私の夫は田舎出身でしたが、その陰気で口やかましい様子を一目見るや、私は自分が埋め合わせしなくてはならない失策を犯したことに気づき

3) 「アテネの人々」の赤裸々な告白癖が、この語り手にも取り憑いている。訳者は前回の「解題」において、「ポルトレ (portrait)」と「告白 (confession)」が共通の地平にあることを示唆したが、ルソーの『告白』よりも前の段階で、こうした地平が歴史的に垣間見えるという事実は、それ自体として興味深い。なお、文学的な方法としての「告白」については、ノースロップ・フライ『新装版 批評の解剖』法政大学出版局、2013年、を参照のこと。

4) 「機械」とは、「身体」のことを指す。モンテスキューの身体観は、デカルトの機械論に大きな影響を受けていた。

ました。さらに厄介なことに、この夫は、私には身に付ける術もない服のポケットから、私とはまったく関わりのない手紙を見つけ出しました。夫がこれらの手紙を通じて知ったのは、私が預かり知らないことでしたし、夫自身も知る必要のないことだったのです。夫は、私を相手に突拍子もない解釈を始めました。私の返事を聞きながら、夫は逆上しました。実際、次のような私の返事は、こうした話題にかかるものとしては、とうてい満足の行くものではありませんでした。「そうかもしれませんが、覚えていないんです」、「あなたのおっしゃるとおりですが、どうしてそんなことになったのか分からないんです」、「答えられることは何もありません。でも、私は決して自分のことでそんな口を聞いたりはしません。」

夫がみずからの不機嫌にうんざりすると、私たちは仲直りしました。夫の態度は元に戻りましたが、彼は私の態度を新鮮に感じていました。夫が理解していなかったのは、私がどんな主張をする時も絶えず否定から始めることで実は何をしていたのか、ということでした。ましてや、私が一日中同じことを望んでいたなどということは、まるで理解していませんでした。私が夫を愛すると、夫はあっさり面食らったものでした。相変わらず妻の演技だと思い込んでいた感情が、まさか自分の耳元で聞かされるとは思いもしなかったのです。夫はあまりに不幸だったので、愛される値打ちがない時の妻を愛し、そして妻がその愛に値する時には愛することを止めてしまいました。

この話で多くのことがはっきりするでしょう、アイエスダさん。ある人たちの性格が、その性格自体と相容れないような場合は、彼らの魂が二つあると考えれば、もう驚くには及ばないわけです。

私はアフリカの黒人たちの国に生まれました。七歳の時、この世で最も惨めな手術を施され、東洋の貴人の邸宅で奉仕するために売り払われました。

私は段々、宦官長の地位へと出世していきました。私の前では何事も隠しだてはされませんでした。どんなに貴重なものでも私の眼前に惜しみなく晒されたものでしたが、私自身は羞恥心そのものによって軽蔑を受けていました。

ハーレムの妻たちの一人は、私を虜にする術を知っていました。もっとも、私が秘密を漏らすことは決してありませんでしたけれどね。この女に取り入るには、その主人、つまりはわが主人に対して、その美しさを褒めたたえてやらなければなりません。私は心が引き裂かれるような思いでした。彼女を主人の腕の中へと導くことが、私が果たすべき義務だったのですから。自分が導かれていることを認めたくないがゆえに私の前に飛んでくる彼女の姿を見ると、あのぞっとする寝台の上で愛の言葉を囁く彼女の声を聞くと、私は千の死よりも過酷な苦しみを感じたものでした。

私はこの女を浴室に連れていくために、寝台から引きずり出したものでした。まったくこいつときたら、そんな私に向かって自分が感じる快楽のことばかりしゃべりたてたのです！

私はひとりごちたものでした。「ここにいる奴隷たちはみんな、女たちも私も、たった一人の男の逸楽のための道具に過ぎない。私が残忍な手術のせいでこんな立場に追いやられたのは、あの男の逸楽を確保するためなのだ。あの男がより穏やかになるために、私は苦しみにさいなまれている。あの男は快楽に浸り切っていて、もっと享楽するために享楽している。そして私ときたら、結婚するどころか、われながら空しく感じる観念すら抱けず、たちまち幻滅に変わる欲望も感じられない始末だ。」

私に大いに教訓を与えようと望んだ守護霊は、魂の住みかを変えてしまいました。私の魂が主人の体を動かし、主人の魂が私の体を動かすことになったのです。それにしても、正直に申し上げますが、すべてを持ったか

らといって、何も持っていなかった時よりも幸せになったわけではありませんでした。

私は病氣と倦怠と嫌悪感で打ちひしがれていました。一人の妻のせいで、もはや私はどんどん衰弱していくしかなくなりました。不能で始まり、不能で終わる愛について、いったいなんと言えはいいのでしょうか？こんなものは、奮起した官能がさらに多くを追いかけることで生じる、不幸な産物でしかないというのに。どんな官能の企ても所詮は虚しい努力であって、幸福の絶頂のすぐそばにしながら、それへの期待を絶たれているとは、とんでもない境遇ですよ！⁵⁾

私は、かつて熱愛した女のことを再び意識するようになりました。もしも人がその時、あの女の美しさもいつの日か君の心を打たなくなるだろうよ、などと口出ししてきたとしても、決して信じることはなかったでしょう。そんな魂の至福も残酷な手術のせいで阻まれていたわけですが、もしも神々がこのおぞましい妨害を終わらせてくれるかもしれないと予見できていたなら、わが魂もかつてないほどの喜びを感じていたことでしょう。この世で最も美しい女の存在も、その女の眼差しも、その女の愛撫も、どれもこれも何一つとして、私の心に響くことはありませんでした。その女の両腕に身を委ねてはみたものの、憔悴そのものから来る苛立ちしか感じませんでした。過度の快樂は、様々な快樂の節制を通じてしか得られないと確信するだけの理由がたんまりと私にはあったわけです。

この間、したい放題に慣れ切っていたわが主人の魂は、自分が所有した身体を、ハーレムにとっては実に途方もない企てへと導いていきました。

5) この下りには、ハーレムの主人と宦官の相補的な関係を描いた小説『ベルシア人の手紙』の問題意識が見て取れる。主人と奴隷は、互いの魂が入れ替わっても、互いに補完し合いながら閉鎖的な監視社会の維持のために機能し続ける一。これが、モンテスキューによる専制批判のエッセンスである。

こうして、その生まれ変わった宦官は、厚かましくもあらゆる瞬間に欲望を剥き出しにするようになったのです。私は厳しい処罰を命じましたが、元々は自分のものだったその体に対して、ある種の憐れみに捕らわれたものでした。黒く、醜く、去勢されていましたが、それでも私はその体に好感を持っていたのです。

アイエスタさん、一度でも魂の転生の神秘を知ってしまうと、ほとんどあらゆる自然の現象を説明できるのです。ご承知のように、すてきな婦人が、とても醜い愛人を持っていますよね。ぞっとするような女に胸を焦がす男もいるわけです。果たしてこういう人たちの魂が体を取り替えたことなどないなんて言えるのでしょうか？

次なる転生において、私は自分が女になっていることに気づきました。私はキプロス島の出身で、一人の貴人のもとに嫁いでいました。この夫は、最初から全財産を食いつぶし始めました。どんなふうにしたのかは、私にも分かりません。というのも、誰一人として気づかないうちに、夫は破産していたのですから。こういった境遇にあって、私は一人の女が宮廷への出入りを通じて得ることのできる方策を使いました。運命が君主の寵愛から遠ざけた方々の案件に首を突っ込んだのです。私は寵臣たちや大臣たちと面識があり、しばしば彼らに謁見していました。この方たちの性格について言えば、その虚栄心が満たされるのは、自分が男性に下らないお世辞を述べたり、女性に挨拶したりしている時でした。男性と同席すると、彼らは自分の偉大さを見せびらかしたが、私たち女性と一緒にいる時は、自分の愛想よさを示そうとしました。私に関して言えば、求めることは好きでしたが、勝ち取ることも好きでした。人から何と言われようと、いつもわが道を行きました。それに、人が私の前で並べる主張に関して、それに耳を傾けようと思い上がるほど愚か者ではありませんでした。それどころか、人が躍起になって、そんなことは不可能ですよと説明した

後でも、私はその一件を蒸し返して要求しだすので、たいそう驚かれたものでした。彼らが私に語り聞かせたのは箴言と規則でしたが、私は礼節と敬意について語っていました。それは前例がないんですよと彼らが論じに来た時は、あなたたちは私のために実例を作ろうとしないんですかと驚き、呆れ果てるばかりでした。

こんなふうには、私は国務に就く男たちのもったいぶった態度を正そうと努めてきた次第です。そうでもしなければ、一体全体、私たち女はどうなってしまうことでしょうか？ あなたにも予想がつくと思いますが、単なる妻に過ぎない女というのは、身持ちによって夫を破滅させるか、さもなくば身分によって夫を破滅させるものです。これに対して、臨機応変にふるまえる妻というのは、身分によって破滅させかねない家柄を、身持ちによって立て直すわけです。

さて、アイェスダさんは脱線と感ずるかもしれませんが、一つの考察を述べてみますね。それは、多くの人々が運命の後を追いかけて回すのは驚くべきことではない、というものです。自分は運命の計らいと無関係だと捉えるだけの十分な理由がある人は、ごくわずかなのです。あなたが無礼に生まれついたのなら、結構なことですよ。ほんのひとふんばりで威光を手に入れるでしょうし、そこから破廉恥まではひとつ飛びで達するわけですから⁶⁾。あなたが愚か者に生まれついたのなら、それもまた結構。人はあなたを高い地位に就けるでしょうから、あなたが好きにできるのは表向きだけで、中身はいつでも空っぽになるでしょう。あなたが出鱈目なおしゃべりをしたとしても、実に恵まれたものです。世の中の半分は喜ぶますし、

6) 「無礼」「威光」「破廉恥」という訳の原語は、それぞれ *l'impertinence*、*l'importance*、*l'impudence* である。綴りを見れば分かるように、この三つの単語は、ひとまとまりの駄洒落となっている。しかし、その分、それぞれの語が多義的になり、画一的な訳語を当てるのが極めて難しくもある。

残りの半分のうち、きっと四分の三以上は喜ぶでしょう。あなたが愚鈍さゆえに無口になるのなら、それも申し分のないことです。良識ある人物の仮面をかぶるには、もってこいですからね。わが道を行き、歩みましょう。運命の女神フォルトゥーナの息子たちが私たちよりも前に探し回った道を、人が私たちに示すことなどできないでしょう。

その後、私はたいへんな美女に生まれ変わりました。私はまだ愛が何なのかを知りませんでした。人にはその愛を吹き込みたがっていました。十二歳のとき、私は想像するだけでしたが、十三歳になると、人に自分を口説かせていました。早くも私は自分が拒んでいるものを認め、自分が延ばしているものを急かし、自分が求めているものを請け合っていたのです。純真な女から、私は内気な女になっていきました。私は人から安心させてもらうに任せていたので、どんな時でもたいそう大胆なふるまいで終幕するのです。ぜんぶお話しするには長すぎるアテネでの十四年間の色恋沙汰の後、私はエフェソスに行きました。そして三ヶ月の間、とても慎み深くしていたので、ある青年が結婚してほしいと懇願してきたほどでした。私は焦れる青年を尻目に、生娘としての準備を整えるために二週間かけたものでした。その試みが成功したわけではありませんが、疑いではなく驚嘆の念を夫に抱かせるくらいには、私も十分に運がよかったです。最初の恋の炎が消えると、夫は自分の哀れさに気づいたので、私が色事の手引きをするのを受け入れました。そこで私は元々の生き方を取り戻したのですが、まだブルジョワの愛人しか持っていなかったのが、ほとんど尊敬してもらえませんでした。ところが、幸運にもある大貴族と、それからある金持ちに気に入られたことで、私は突然寵児となり、誰もが私をものにしたがりました。私は私でもったいぶってみせ、尊大な態度を日々増長させていきました。そして実際の値打ちが低くなるにつれて、私にはどんどん高値がつくようになりました。

恵まれた地位を手に入れると、私はもはや自分の快樂のためにしか愛してはならないと考えました。ところが、そうするようになったのがあまりに遅かったので、これは他人の快樂のためなのです、とはとても言えませんでした。私は絶えず美人の称号にしがみつかずにはいられませんでした。六十歳になっても、いまだにニンフを自称していたわけです。私がかもしだす満足そうな様子や、色香が失われたことへの深刻な無自覚さのせいで、人は私に同じことを言い続けるばかりでした。こうして、人がいつから私に本音を言うのをやめ、いつから偽りを述べるようになったのかが見抜けなかったのも、自分は相変わらず愛すべき女だと思い込み続けていたのです。とうとう、愛人たちがあまりに尊大な態度を取るようになり、ありったけの金をだまし取っていったので、私もようやく目を開かれ、自分一人では決して見つけられなかったはずの秘密を教わりました。私はあまりに幸福だったので、ほとんど生きるのを止める必然性を感じた時にしか、老いる必然性を感じなかったほどです。

アイェスタさん、私は実にしばしば女になったり男になったりしたので、二つの性のうちのどちらが有利かについて、テイレシアス⁷⁾よりもきちんと言えるのです。私は男性と女性の強みも弱みも正確に知っています。ここではただ、一点だけ述べておきましょう。つまり、女だった時に私が自負していたのは、自分が出会ったあらゆる男たちを幸せにするために生まれたということでした、と。私は、自分が自然をまるごと動かして、男たちは順繰りに自分からの作用を受けている、と信じていました。結局のところ、神々はあらゆる貴重なものと申し分のないものを、私の寝台のカーテンの中に入れてくれたのだ、と信じていました。快樂を分け与えながら、虚栄心がもたらす最高の快樂を味わっていたのです。

7) テイレシアスは、ソフォクレスの『オイディプス王』に登場するテーバイの預言者。両性具有者だったとされている。

私はもう一度女に生まれたのですが、沢山の方々に気に入られ、実に多くの浮名を馳せ、実に多くの物腰を身に付けました。おかげで、ぱっとしなかった夫の家が有名になりました。私が世の中から夫への評価を引き出したわけではありませんが、一種の配慮を引き出したことだけは確かです。彼らの配慮というのは、配慮そのものに逆行しているように見えるので、私もその定義を明確に示せるわけではないのですけれど。

私をとっても愛してくれた母は、いつもこう言っていました。「さあさあ、彼らにはしゃべらせておきなさい。無名であることは、まったくこの世で最悪の事態ですから、とにかくそこから脱しなさい。徳によって抜け出せないなら、一種の悪徳によって、あるいはせめて物笑いの種になっても抜け出さなければなりません。忘れてはいけませんよ。最低の卑しさとは、世の中からはっきりとした軽蔑を受けることすらできないような家の者たちのことを言うんですからね。」

(この章、続く)